Medal of Honor Silver Ster

機甲の拳を突き上げる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｅｄａｌ　ｏｆ　Ｈｏｎｏｒ　Ｓｉｌｖｅｒ　Ｓｔｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ６２９６Ｖ

【作者名】
機甲の拳を突き上げる

【あらすじ】
この作品は戦場のヴァルキュリアとＭｅｄａｌ　ｏｆ　Ｈｏｎｏｒ　とのクロスオーバー小説です。ＦＰＳゲームでのクロス小説は２番煎じで面白くないとかここパクリじゃねとかあるかもしれませんが・・・・お許しください。それでも見てくれたり面白いと思ってもらえるように頑張ります

＊これは人が死にます。それを嫌悪したりダメな人は回れ右することを推奨します（かなりの確率で主人公側に人間が死にます）

プロローグ（前書き）

２００１年　アフガニスタン紛争

９．１１事件後の有名な出来事である。多くのアメリカ軍の方々がアフガニスタン向かいその命を散らしたことにまずご冥福をお祈りいたします。

プロローグ

ある山での戦闘、ＣＨ－４７『チヌーク』の中にはアメリカ陸軍第１大隊第７５レンジャー連隊救出部隊とアメリカ海軍特殊作戦部隊Ｎａｖｙ ＳＥＡＬｓ Ｔｉｅｒ １ Ｏｐｅｒａｔｏｒが乗っていた

救出任務を終えレンジャーは３人を失い、ＳＥＡＬｓも１人の英雄を失った。その英雄の名はラビット、取り残された仲間の為にヘリから飛び降り、捕虜となり重傷を負うも生きることを諦めなかった勇敢な兵士である

「・・・・ラビット」

ヘリの床に寝かされたラビットの傍に座るＮａｖｙ ＳＥＡＬｓ隊員、ラビットが何時も身に着けていた幸運のお守り（『ウサギの足』と呼ばれる幸運のお守り）を手にしているのはＮａｖｙ ＳＥＡＬｓ隊員のプリーチャーである

彼は取り残されたＳＥＡＬｓの１人であり、救出に来ていたレンジャー連隊のダンテ・アダムスとジムパターソンと共に捕虜になっていたマザーとラビットを救出した。アダムスはお守りを哀しい目で見ながら握りしめていた

「・・・・このままじゃ終わらせねえ」

同じＮａｖｙ ＳＥＡＬｓ隊員、ブードゥーが言うと

「・・・・あぁ、終わらせねえよ」

プリーチャーが顔をあげて言った
航空支援にやってきた空軍の戦闘機Ｆ－１６が山を爆撃してる中、
なにやらコックピットが慌ただしかった
「おい、目の前のは積乱雲じゃないのか？」
「だがレーダーには何も反応がないぞ」
その様子に疑問を抱いたレンジャー連隊のパターソン軍曹がコックピットに近づいた
「おい、どうした？」
パターソンがパイロットに話しかけると
「目の前に積乱雲が発生していまして、それがレーダーに反応が無いんですよ」
それに頭をかしげたパターソンは
「回避できるのか？」
「ダメですね、目の前の積乱雲が大きすぎ、回避不可能です」
それを聞いたパターソンは顔を顰めながら
「墜落は勘弁してくれよ」

そう言うと

「まかしてください軍曹、無事帰還してみせますよ」

パイロットが笑いながら言うと、パターソンはそれを信用し機内の兵士に内容を伝え、全員がシートベルトを装着し後ろのハッチが閉じた

ヘリはそのまま積乱雲の中に突入に激しく揺れながらも飛行していたが、いきなり“ガクンッ！”と大きく揺れると、けたましい警報音が響いた

「クソッタレ！操縦が！？」

コックピットの方でパイロットが悪戦苦闘しながら操縦桿を操作していたが

「メーデ！メーデ！こちらブラウラー０４！操縦不能！操縦不能！墜落する！」

パイロットが大声で無線に叫びながらヘリが横回転しながら落ちていき、それによる強烈なＧで機内にいた全員がブラックアウトした

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます

他の作品と並行して進めていくので更新が遅いです（断定

それでもなるべく早く投稿するようにがんばります

感想などくれたら泣いて喜びますんで、どんどんお願いします

設定（前書き）

更新したらまた上げます

設定

人数

歩兵１５８名、工兵４０名、戦車兵及び乗組員２８名、パイロット１４名、合計２４０名の戦術部隊。特殊部隊は、最低でも６人以上。

アメリカ陸軍第１大隊第７５レンジャー連隊　１００名（６人はヘリパイロット）

アメリカ海軍特殊作戦部隊Ｎａｖｙ　ＳＥＡＬｓ　４名

アメリカ陸軍第１特殊部隊デルタ作戦分遣隊　１０名（２人はヘリパイロット）

アメリカ陸軍第４機械化歩兵師団第２５アルファー小隊（Ｍ１Ａ１エイプラムス）　１２名

アメリカ陸軍第４機械化歩兵師団第３２アルファー小隊（Ｍ２ブラッドレー）　２７名（固有搭乗者９名＋搭乗兵１８名）

アメリカ陸軍第７機械化歩兵大隊第２２ストライカー小隊　２５名（固有搭乗者７名＋搭乗兵１８名）

アメリカ第２２海兵隊遠征隊第１６チャーリー小隊（ＨＭＭＷＶ）　１６名

アメリカ陸軍需品科分遣隊及び武器科分遣隊　４名

アメリカ第３海兵遠征軍戦闘工兵大隊ブラボー小隊　４０名

アメリカ陸軍第１大隊第２航空連隊　６名

兵器

Ｍ１Ａ１　３

Ｍ２ブラッドレイ　３

Ｍ１１２６ストライカー（１０５ｍｍ榴弾砲、４０ｍｍグレネード＆１２．７ｍｍチェーンガン、通常仕様の３両）

ＨＭＭＷＶ（非武装２両、ミニガン装備、ＭＩＮＩＭＩ装備の４両。ＭＩＮＩＭＩをＭ６０かＭ２４０に換装するのもアリ？）

ＡＴＶ　４（デルタ）

ＡＨ－６０　３機

ＣＨ－４７　３機

ＵＨ－６０　１機（特殊部隊？が使用）

Ｍ９３９トラック５両（２両が弾薬、１両が食料、工兵のもので、１両はデリック装備）

武器、Ｍ１６Ａ４（Ａ２は工兵が携帯），Ｍ４，ＨＫ４１６，Ｍ２０３，Ｍ１４　ＥＢＲ，Ｍ２４９，Ｍ６０，Ｍ２４０，ＡＫ－４７（５，５６ｍｍ弾ユニバーサルボルト仕様。作った奴のあだ名はギークボーイ）ＳＲ２５，Ｍ２４，Ｍ８２，Ｍ９，ＭＥＵ，Ｍｋ．２３，

カールグスタフ（４門、予備２門。弾薬１８発）、ＡＴ－４（１５門）、ジャベリン（６発、照準器２基）、Ｍ７２　ＬＡＷ（歩兵が対施設用として携帯、２２門）、クレイモア（２０個）、Ｃ４（合計３０ｋｇ）

1話　異国

「がっ・・・・・クソ」

そう呻きながら体を起こしたのはレンジャー連隊所属のダンテ・アダムス特技下士官だ。強烈なGでシェイクされた頭はかなりキツイみたいだ

「起きたかアダムス」

頭を押さえながら声の方を向くと、パターソンがいた

「・・・・・軍曹、無事でなによりです」

「あぁ。俺らだけじゃなく皆無事だ・・・・ヘリもな」

「そうです・・・・・ん？ヘリも？」

アダムスの疑問はヘリが無事であると言うことだ。回りを見回してみたが機内には破損がなかった

「記憶違いで無ければ墜落していたはずですが？」

「外を見てみれば分かる」

頭痛で痛む頭を我慢しながら立ち上がりヘリの機内から外にでると・・・・・そこは目の前一杯に広がる緑だった

「・・・・・・」

アダムスは目の前の光景に一瞬思考が飛んだ。それもそのはずだ、彼らが先程いた場所はアフガニスタン。荒野の大地と雪が積もった高い山ぐらいしかない国にいたはずが、目の前の光景は輝く緑の絨毯に生い茂る木だからだ

「ここは・・・一体」

「分からん。ＧＰＳも反応無し、今パイロットが無線で呼びかけている所だ」

「ＧＰＳに反応なし！まさかそんなはずが！？」

ＧＰＳ・・・正式名所はグローバル・ポジショニング・システム、これは宇宙へと衛星を上げ、そこから受信した電波で受信地点を正確な３次元位置が得られるのである。アメリカはＧＰＳ衛星を少なくとも２０以上もあり、現在地が分からないはずが無いのである

「事実だ、ヘリに積んでるＧＰＳはイカれていない。配線等を調べたが異常は無く壊れていないのに繋がらない。何回も試したがな」

アダムスは無理やり納得し回りを見渡すと・・・・・あり得ない顔をした。彼らが乗っていたヘリ、ＣＨ－４７Ｄ『チヌーク』の特殊作戦用の改造されたＭＨ－４７Ｄに乗っていたのだが・・・・・その隣に『チヌーク』が２機並んでいた

その２機からも何人か外に出ており大半が見知った顔だった。何故なら彼らの野戦服についてある紋章が自分と同じ『第７５レンジャー連隊』のものだった

「おい！」

近くにいた仲間に声を掛けると

「ダンテ！お前もいたのか」

アダムスが声を掛けた相手は同僚であるバージル・ネルソン伍長だ

「確かお前たちはムジャヒディンのキャンプ破壊に行ってたんじゃ？」

「ああ。そしたら何か目の前に積乱雲が現れたとか何とかで、操縦不能になり墜落していって目が覚めたらここだったんだ」

それに驚いた表情をするアダムス

「お前たちもか。俺達も作戦後帰還中に積乱雲に突っ込んで墜落、さっき目が覚めるとここだ」

ネルソンが何やら考え込んでいた

「・・・・偶然にしちゃ出来過ぎてないか」

「お前もそう思うか？・・・・・俺もそう思っていたんだ」

二人は座り込み考え込んだ

皆が状況確認をしている中、ある一角は静かに黙祷していた。それはＮａｖｙ　ＳＥＡＬｓの隊員達である

「・・・・すまないラビット。お前を祖国に帰すのは難しそうだ」

マザーはすまなそうにラビットに言った。彼らはＧＰＳが届かないと聞き、ここはかなり遠い国の田舎・・・・・つまり死体を保存する方法が無ければ施設も無い。故にラビットは此処に埋めるかも知れないと言うことだ

「せめて嫁さんにはちゃんとこれを渡す」

プリーチャーはお守りを見ながら言った。・・・・・・・・すると

「う・・・・ん」

今の声にＳＥＡＬｓ隊員達は固まった。なぜなら今の声は間違いなく

「う～～ん、あれ？ここは・・・・」

横になって死んでいたはずのラビットが上体を起こしたのだ。それに隊員達は口をあんぐりさせていた。ラビットは回りを見回し

「隊長・・・・自分は助かったのですか？」

ラビットがマザーに尋ねると

「メ・・・・メディーック！メディーック！急いで来てくれ！」
マザーがそう叫ぶとそこにいた全員がマザーに注目し、メディック
が急いで駆け寄った
「ｓｉｒ！どうしましたか！」
「こいつ診てくれ！」
マザーがメディックにラビットを診た結果
「健康な状態ですよ」
と診断された
「隊長、一体なにが」
ラビットがマザーに尋ね、情報を聞くと
「そうですか・・・・・一度死んだのですね自分は」
ラビットはそう言うと立ち上がった
「今の自分は生きてますんで大丈夫ですよ」
そう笑って見せた。その表情に安心した表情をした面々だった
するとプリーチャーがラビットに肩を回し
「これのおかげで生き返ったかもな」

と言いながらラビットにお守りを渡した

「かもしれませんね」

と笑うラビット達だった

パターソンはヘリのコックピットに近づきパイロットに声を掛けた

「どうだ繋がった？」

パイロットは首を横に振り

「いえ、まだです」

パイロットは再び無線に向け

≪こちらブラウラー４、どうぞ≫

≪ザーーーザーーー≫

聞こえてくるのは砂嵐の音だけであり、周波数を変えながら

≪こちらブラウラー４、誰か聞こえないのか！≫

諦めが表情に出てきていた・・・・・その時に

≪ザーーこ・・ザーーープ・・ザーー聞こ・・ザーーー≫

無線から砂嵐の音に混じって声が聞こえ、それにパイロットは周波数を必死に合わせ

≪こちらブラウラー４、聞こえるか！どうぞ≫

≪こちらガンシップ０６、聞こえるぞ≫

無線からはっきりとした声が聞こえパイロットとパターソンに気力が戻る

≪ブラウラー４よりガンシップ０６へ、そちらの現在位置はわかるか？≫

≪いや、ＧＰＳが壊れたのか現在地は不明。森の上空を飛行中≫

その声から数秒後、どこからかヘリのローター音が聞こえてきて、パターソンが上空を見ると・・・・３機のアパッチとブラックホーク１機が現れた

≪こちらガンシップ０６、いま目の前の居るのが君たちか？≫

≪そうだ、会えて嬉しいよガンシップ０６≫

アパッチとブラックホークが着陸すると飛んできた方向からエンジン音が聞こえ、兵士達が銃を構えるとＭ－ＡＴＶバギーに乗った４

人にＭ１Ａ１エイプラムス３両、Ｍ２ブラッドレー３両にＭ１１２６ストライカー３両、ＨＭＭＷＶ４両、Ｍ９３９トラックが５両現れ兵士達は唖然としていた

部隊の一番階級が高い人物が集まり情報交換を始めた

「アメリカ陸軍第１大隊第７５レンジャー連隊のゲンリー・フォード少尉以下１００名」

「アメリカ海軍特殊作戦部隊Ｎａｖｙ　ＳＥＡＬｓのＴｉｅｒ　１　Ｏｐｅｒａｔｏｒマザー大尉以下４名」

「アメリカ陸軍第１特殊部隊デルタ作戦分遣隊のＴｉｅｒ　１　Ｏｐｅｒａｔｏｒパンサー大尉以下４名に他６名の１０名」

「アメリカ陸軍第４機械化歩兵師団第２５アルファー小隊のダニエル・マクレイン曹長以下１２名だ」

「アメリカ陸軍第４機械化歩兵師団第３２アルファー小隊のジョン・ブレムナー中尉以下２７名」

「アメリカ陸軍第７機械化歩兵大隊第２２ストライカー小隊のバニング・フォスナー中尉以下２５名」

「アメリカ第２２海兵隊遠征隊第１６チャーリー小隊のドミニク・フラガ少尉以下１６名」

「アメリカ第３海兵遠征軍戦闘工兵大隊ブラボー小隊のトニー・ジャクソン少尉以下４０名」

「アメリカ陸軍第1大隊第2航空連隊のブラッド　”ホーク”　ホーキンス大尉以下6名」

彼らは『チヌーク』の中に集まり他の兵は武器等の確認や見張りをしていた

「まず自分達は情報部ムジャヒディンがいるキャンプ破壊の任務で向かっているいる途中で嵐に遭いここに来ました」

ブレムナー中尉がそう説明すると

「俺達と一部のレンジャー以外は全員施設破壊に向かっていたと」

マザーが確認をするかのように言うと

「俺達は違う任務だが、基地をでて数時間後に砂嵐に襲われここに来た」

パンサーがそう説明し

「あのトラックの中身は？」

「2両が弾薬、1両が食料、2両が工兵輸送、内一台がデリック装備です」

ジャクソン少尉がマザーに説明し

「ヘリの方はどのぐらい飛べる？」

「『アパッチ』と『ブラックホーク』に2機の『チヌーク』補給を

し終えたばかりだから安心してくれて構わないが、もう1機の『チヌーク』は少々心持たないな」

全員が考え、意見を交わし合いしてると

「やはり偵察を出すべきですか・・・・」

フォード少尉がマザーに言うと

「ここが何処か分からんし下手に動けん・・・・・となると」

マザーはパンサーの方を向き

「我々で偵察か・・・」

「それが妥当だな」

マザーとパンサーは頷き皆の方を見ると

「無線はオープンのままにしておく、もしかしたら本部と繋がるかもしれん。我々が偵察に行っている間はホーキンス大尉にまかせる。目的地は此処から見える風車まで向かう、町があるかもしれないしな」

マザーがそう言い立ち上がると会議が終了した。Ｔｉｅｒ　１　Ｏｐｅｒａｔｏｒの面々が装備を確認しお互いに点検し終えＡＴＶに乗ると風車めがけて駆けていった

１話　異国（後書き）

読んでいただきありがとうございます

今回出てきたように、弾数は無限ではありません１０５ｍｍ以下はガリアでも造れますがそれ以外が問題で頭を悩ましてます・・・・

感想とか何かあればどんどん書いてくださいｗ

2話　介入

ＡＴＶがエンジンを吹かせ道を走り風車を目指している。

しかしそれが走る道の両側にはのどかな自然が広がり、武骨な軍用車などおおよそ不釣合いな光景だ。

「のどかな所だな・・・・・」

ＡＴＶを操縦するデルタフォース隊員、デュースがそう言うと

「まったくですね。川の水なんか透き通ってて、ここからでも魚が見えますよ」

後ろに乗っていたＳＥＡＬｓ隊員のラビットが、どこか呆気にとられたような返事を返した。

他愛のない会話をしながら川沿いを走っていると

「止まれ」

唐突に無線機から野太い声が響き、２人を我に返らせる。デルタフォース隊長のパンサーからだ。

Ｍ－ＡＴＶが全車停止すると、全員が車両から離れながら武器を構え、全周警戒のフォーメーションをとった。

すると周囲には、微かにだが硝煙の臭いが漂い、全員の警戒心が更に上がる。

パンサーが警戒しながら、爆発したらしい3輪自動車に近付く。

「珍しいな、3輪自動車か・・・・・・トヨタでもジゼルでもない」

アフガニスタンのような紛争地域にすら4輪駆動の自動車が走るなかで、3輪タイプを現役で使っている所などよほどの片田舎なのだろう。

「パンサー」

デュースがパンサーの方に近歩み寄ってきた。その手にはいくつかの空薬莢が握られており、それらは日光を浴びて鈍く光っていた。

デュースはその薬莢の一つを、パンサーの胸の前に突きだした。

それをパンサーが受け取ると同時に、デュースは怪訝そうな声を挙げた。

「7．92mmなんてソマリア以来ですよ。しかもこいつを造ったのは、東ヨーロッパ帝国連合兵器工廠、、、、、いったいどこです？」

ヨーロッパに存在する国家の大半はNATO加盟国で、その国軍で使用している小銃も、その大半がNATO基準の5．56mm弾か、或いは旧式の7．62mm弾である

ナチス・ドイツ時代の遺物である7．92mm弾を生産している工場は、確かに存在する。だが彼は「東ヨーロッパ帝国連合兵器工廠」

などという工場も、また「東ヨーロッパ帝国連合」などというイカレた名前の国家も、世界各国の軍隊を知りつくした彼ですらまったく知り得なかった

彼は自分の知り得ないテロ組織にそのようなものがあるのだと考えたが、それにしても妙な話だった。

「それだけじゃないぞパンサー、こいつも妙だ」

続けざまにマザーがパンサーに見せたのは、同じく空薬莢だった。先ほどまで見つめていた薬莢をポケットにしまい込み、パンサーは差し出された空薬莢を受け取った。すかさず底部を覗きこむと、これは7．5mmと言う珍しい口径だった。

「ガリア国営兵器工廠？そんな国ヨーロッパにあったか？」

マザーとパンサーは眉を顰め、頭を捻らせて考えを巡らせたが、やがてパンサーは向き直って、

「考えても埒が明かん、先に進もう」

と、部下を見回しながら声をあげた

パンサー達がATVに戻ろうとした時、重く響く聞き覚えのない砲声が響いた。その音を聞いた全員が、その場で伏せながら周囲を警戒する

そしてデュースの目に映ったのは、目的地である風車が、爆発で砕け散る瞬間だった。砲弾が命中したのだと、デュースにはすぐ分か

った。

砲弾が直炸裂した爆音と共に、風車が倒壊する音がデュース達の所まで聞こえてきた。

≪ブラウラー４、こちらマザー。今撃ったのはお前らか！≫

≪いや、此方は撃ってない。風車が破壊されたのはこちらも目視した。ヘリを出してもいいが、何処の国かも分からず戦争介入はまずい≫

もし不穏に戦争に介入すれば、アメリカとの国際問題になるかもしれない・・・・・だが

「マザー！一般市民が巻き込まれているかも知れません、救出を！」

ラビットがマザーにそう言う。ラビットには６人の子と嫁がおり、この事態を見過ごせないのだろう

≪ブラウラー４、現在本部との通信が繋がらず指示もない。いま優先されるのは現場の判断だ、戦争に巻き込まれ涙を流す人々を見捨てるのは栄えあるアメリカ合衆国１市民として軍人としても見過ごせぬ事態だ！≫

マザーは振りむきラビット達の方をみると

≪これより民間人救出に向かう≫

無線を聞いたＳＥＡＬｓ、デルタ隊員は共に口元に笑みを浮かべ、覚悟ある漢の表情を浮かべる。

≪ブラウラー４了解。何時でも航空支援を出せるようにします、援軍は？≫

≪先ほどの砲撃は、迫撃砲か戦車の可能性がある、Ｍ１と１個小隊を頼む≫

≪ブラウラー４了解、アウト≫

マザーは無線機を直し、

「よし、行くぞ！」

男たちはＡＴＶに跨り、壊された風車目指して駆けた

アメリカ軍特殊作戦部隊「ＡＦＯ　ウルフパック」、デルタフォース

町に着いた時には既に銃声が響いており、マザー達と二チームに別れて民間人救出にあたったが、奇妙な事実に隊員は当惑していた

民家を一つ一つクリアリングしているが、取り残された人はおろか、未だ敵らしき存在も発見できないのだ。我々は罠に誘われたのか？

隊員の顔にに緊張が走る
皆が自然と警戒を強めながら進んでいると、離れた場所に2階建ての民家を発見した
「次はあの家だ」
パンサーが指さしながら指示すると、隊員は一定の間隔を保ちながら周囲を警戒し進み、民家に到着した。
「デュースと俺は内部、ダスティーとベガスは周囲を捜索しろ」
ダスティーとベガスは頷き、周囲を捜索しに行った。パンサーとデュースは、家に静かに侵入した。
「俺は2階を探す」
パンサーは足音1つさせずに階段を上り、デュースはＨＫ４１６を背中のマウントに掛け、サイドアームのＭｋ．２３を取り出した。
デュースは一部屋ずつクリアリングしながら進んでいく。
≪コンタクト。1時方向、数３≫
と、無線からベガスの声が聞こえた。どうやら〝人？〟を見つけたらしい。
≪そのまま待機、援護する。デュースはそのまま捜索≫
≪了解≫

デュースが捜索を再開しようとすると、部屋の奥から物音が聞こえた。彼は一気に警戒心を高め、足音と周囲に注意しながら進んでいく。

奥からは話声が聞こえてきた

「なんだこのババァ・・・・・・ガキを孕んでやがるのか」

「・・・・・めんどくせぇ、まとめてぶっ殺してやらぁ」

男の声が二つ聞こえた。

男達の会話が英語だと分かって安堵したが、言っている事が尋常ではなかった。会話の内容から危険な状態だと理解し、再び身体を緊張させ、足を速め移動する。

彼は移動しながら、その手に握られたＭｋ．２３の銃口にサイレンサーをねじ込む。

彼がそうしている間も、確実に状況は悪化していた。

「やめてください」

唐突に、若い女性の声が聞こえた。

「おい、見ろよ。こいつ、ダルクスの布を巻いてやがる」

「どおりで油臭いわけだ。ババァにダルクス人に・・・・ここは豚小屋かってよ！」

男達の興奮した声の後に、再び物音が聞こえた。

これはただ事ではない、・・・・・・。デュースはドアの前に到着するが早いか、そこから静かに様子を窺た。・・・・・・そこからは小銃を構えた小さな少女と、男が2人、彼女を睨んで向き合っているのが側面から見えた。

男達は胸甲のような古臭い防具を身に纏っており、その手には旧式の小銃が握られている。

「この家から出て行ってください」

少女は男達に銃を向けながら、気丈な声で立ち向かっている。

無線からはパンサーが援護位置についたらしく、≪ステンバイ・・・・ステンバイ・・・・≫と聞こえてくる。

「銃を下ろせ、ガキが扱えるシロモノじゃねぇ」

男の一人が旧ドイツ軍のそれのようなサブマシンガンを構えた。

「どのみちダルクス人だ・・・・・面倒だ、殺せ」

男達が引き金に指を掛けた瞬間、デュースの脳裏に焼き付いた記憶がよみがえった。

・・・・・・・助けたかった、しかし助けられなかった、一人の少女の姿が。

その瞬間、デュースの身体は彼の意識を離れ、無意識に動いていた。偶然にもパンサーからのゴーサインが響いたのは、ほぼ同時だった。少女の近くのドアから突然現れたデュースに、男達は反応できなかった。

彼らのうちの一人は、デュースの存在に気付く前に頭を撃ち抜かれた。デュースのＭｋ．２３から放たれた４５ＡＣＰ弾は、男の被っていたヘルメットを容易く貫通し、その内の頭蓋にめり込んだ。

サイレンサーを付けていたので銃声が響かず、彼はどこから撃たれたかすら分からなかった。

もう片方の男は倒れる相棒を振り返ると同時に、デュースは彼の脇腹にも銃弾を撃ちこんだ。

撃たれた男は仰け反りながらもデュースに銃を向けようとしたが、続けざまにもう一発撃ち込まれ、もんどり打って倒れる。デュースはそのまま男達に素早く近寄ると、いまだ呻いていた一人の後頭部に、一発撃ち込んで苦痛から解き放ってやった。

室内に鈍く静かな音が響き、静まり返った。

「エネミークールダウン、クリア」

デュースが我に返った時には、全て終わっていた。

彼は状況の把握にしばらくの時間を要したが、状況を把握すると、

〃　敵　？　の排除を無線で伝えた。

≪ターゲットダウン、クリア≫

≪クリア≫

≪クリア≫

無線からも仲間の声が聞こえた。どうやら排除したらしい。デュースは少女の方を向き、

「怪我は無いか？」

言いながら微笑もうとしたが、顔は緊張した仏頂面のまま動かなかった。

突然の出来事で呆気にとられていた少女も、彼の言葉にハッと正気に戻り

「あ、ありがとうございます、、、、、、あなたは？」

「さぁな、しがない兵隊さ。恐らく君の敵ではない」

と、弛緩してきた顔の筋肉を出来る限り緩ませて笑うと、

「イサラ！マーサさん！」

部屋のもう一つのドアから若い青年が現れた、突然現れた青年に、デュースは反射的に銃を構えたが、

「兄さん！」

後ろの少女が青年に歩み寄るのを見て、引き金から指を離した。

「イサラ！無事だったかい！」

「はい、この人が助けてくれました」

少女はデュースの方を向くと、青年もデュースの方を向いて

「妹を助けてくれたありがとうございます。僕はウェルキン・ギュンター、こっちは妹のイサラ」

ウェルキンに促され、イサラは頭を下げる。

「イサラ・ギュンターです。先程はありがとうございます」

と、ウェルキンが入ってきたドアからパンサーが現れた。

「デュース」

突然現れたパンサーに、ウェルキン兄妹は驚いているようだ。

パンサーのほうも2人に驚いたようで、2人に銃口を向けながら、部屋の状況を確認して眉を顰める。

「その二人は？」

「民間人のようです」

すると部屋の奥から呻き声が聞こえ、その場にいた全員が声の方を振り返る。

「マーサさん！」

テーブルの陰に隠れるような形で倒れていた女性にイサラが駆け寄る、デュースとパンサーは顔を見合わせた。

「妊婦か！？」

「臨月なんです、たぶん産気づいています」

イサラは女性の状態をみると、神妙な顔でウェルキンを振り返った。

「・・・・兄さん、納屋の方へ」

ディースがダスティー達と合流し納屋に向かうと・・・・そこには戦車があった。

その形状は、彼らがアフリカで見かけたフランス軍のそれによく似ていたが、古めかしいリベットや設けられた視察孔など、細部がところどころ違っていた。

なによりその車体を染めていた青い塗装は、これまで彼らが見たどのような車両よりも異彩を放っていた。

戦場で見かけた趣味の悪いスカイブルーとも違う、迷彩効果を考慮したかのような青だ。

イサラが戦車に乗り込むと、聞き慣れないエンジン音と共に、エンジン部分の外側のでっぱりが青白く光りだした。

座学でしか見た事のない、放射性物質の放つ光、・・・・・・チェレンコフ光放射にそっくりだった。

冗談じゃない、・・・・・・デュースは恐ろしくなってウェルキンに聞いた。

「まさか・・・これで妊婦を運ぶのか？」

「はい、そうです」

ウェルキンが肯定とばかり頷くと、パンサーが大声をあげた。

「バカ野郎！妊婦乗せて戦車戦しにいくバカが何処にいる！？救援を呼ぶから、ここから脱出しろ！」

「仲間がいるんですか！？」

驚いたウェルキンが素っ頓狂な声をあげる。

「あぁ、すぐ迎えヘリをよこす！まってろ」

パンサーは無線を取り出して呼び出した。

≪こちらウルフパック1、民間人を3名保護した。一人は妊婦だ、『ブラックホーク』は出せるか？≫

≪こちらブラウラー04、GPSがイカレていて、其方の位置が確認できない。LZ（ランディング・ゾーン）でスモークを焚いてくれ≫

≪了解した、アウト≫

パンサーはウェルキンの方を向き、

「おい、このあたりでヘリが着陸できる広場はあるか？」

と彼に問いかけたが、何を言っているのか理解できないらしく、ちんぷんかんぷんな顔をして、

「ヘリって何ですか！？」

戦車の駆動音に阻まれないよう、大声で聞き返してきた。

「ヘリコプターだ！知らないのか！？」

「しりません！どこの地名ですか！？」

パンサーは、どんなところだよと内心呆れながら、広場は正門前にしかないと言われ、そこに向かう事にした。

アメリカ軍特殊作戦部隊「ＡＦＯ　ネプチューン」、Ｎａｖｙ　ＳＥＡＬｓ

マザー達は町の中を捜索している最中に、敵を思しい集団と幾度か交戦していた。

その統制された動きから、集団がよく訓練されているであろう事が推測されたが、問題はその装備だった。

「奴らの持っている武器、アフリカで見た事がある・・・・そうだ、旧ドイツの物に似てなかったか？」

「あぁ、まさか連中はネオナチか？」

隊員は小声で会話しながらも周囲を警戒しながら、皆で民家の壁に張り付くように進んでゆく。ラビットが角から確認しようとすると、野太い声が聞こえてきた。

「ダルクス人か、こいつら」

「とっとと殺すか」

何事かと急いで確認すると、娘を抱き守ろうと伏せている女性に、〝敵？〟が銃を向けていた。

その姿は、同じ〝父親〟としてのラビットの逆鱗にふれた。

「コンタクト！」

ラビットは叫ぶと同時にＭ４を構え発砲、その声に気付いた時には既に一人は体を数発撃ち抜かれていた。

「なっ・・・」

銃声の方向を向いた時には、敵兵はす既に琴切れていた。ＳＥＡＬ

S全員からの集中砲火で、体を蜂の巣にされたのだ。

「クリア！」

ラビットが叫ぶと、全員が急いで母親達の傍に向かい、周囲を警戒する。

「奥さん怪我はないか？」

ラビットが声を掛けると

「あ、ありがとうございます。貴方達は・・・・・・」

「説明は後で、今は避難を」

言いながら、ラビットは母親に手を貸して起こしてやる。と、母親の胸に抱かれている少女が、目には一杯の涙を溜めていた。

ラビットは彼女にやさしく微笑みながら、小さく震えるその頭を撫でてやった。

「もう大丈夫だ、怖い人はやっつけたよ」

少女はラビットの方を向き、不安げな目をラビットに向ける。

「ほんと？」

「あぁ、本当さ。さぁママと一緒に安全な所に行こう」

ラビット達が母親と子供を安全な所に移動しようとした瞬間だった。

「戦車だ！」

男の叫びが聞こえた。その声に驚きながらも、マザーは落ち着いた声で母親に話しかける。

「奥さん、あの家でじっとしていてください。すぐ迎えにきます」

「わ、わかりました」

マザーが比較的壊れていない家に連れて行き、その場を離れようとした途端・・・先ほどの少女が、ラビットのズボンを掴んでいた。その顔は涙で濡れ、ウサギのぬいぐるみを片方の腕で抱いていた。

ラビットはその場にしゃがみ込むと、

「また怖い人たちが来たから、やっつけてくるね。ちゃんと迎えに来るから、いい子にしてるんだよ」

微笑みながら少女の頭を撫でた。

「ぜったい？ぜったいむかえにきてくれる？」

少女は涙を流しながら問いかける。その身体は、不安げに小さく震えている。

「あぁ、絶対だ。だからママから離れちゃダメだよ」

少女はズボンから手を離し、ぬいぐるみを抱きしめ頷いた。

ラビット達は急いで現場に向かう。彼らがそこで見たのは、大きな門を攻撃する戦車と、それをたった3人で、土嚢で出来た簡易陣地で防衛する兵士の姿だった。

「コンタクト！」

マザーが叫ぶと、全員が先程の鎧を着た兵士に発砲。

その姿を驚くように見ている簡易陣地にいる3人を横目に、マザー達は簡易陣地に向かい走り陣地内に身を隠した。

「おい！ここの隊長はだれだ！？」

マザーが3人に大声を上げて問うている間も、ラビット達は応戦していた。

「わ、私です！」

身を潜めながらマザーに走り寄ってきたのは、まだ２０にも満たないような女性だった。

身形と雰囲気から察するに、おそらく新兵だろう。

「名前は！？」

「アリシア！アリシア・メルキオットです！あなた達は！？」

マザーはアリシアの大声を聞きながらも、迫りくる敵から銃口を外さない。

「俺達は・・・しがない兵隊さ！少なくとも嬢ちゃんらの味方さ！あいつらは一体何者だ！？」

マザーは飛んできた銃弾に、壕に体を隠しながら聞いた。

「帝国兵ですよ！そんなことも知らないで戦っているんですか！？」

アリシアが驚いた顔をして叫ぶ。

「どちらにしろ俺達の敵だ！応戦しろ！」

アリシア達も応戦しはじめ、徐々に態勢を持ち直してきたが・・・・・・まだそこには戦車がいた。

戦車はマザー達に目もくれず門に砲撃、門が崩れはじめた。

「あぁ・・・門が」

アリシアは悲痛な声を出したが、

「まだ壊れてない！そんな声上げてる暇があるなら撃て！」

マザーの大声が響き、我に返って射撃を続けた。

「ラビット、ランチャーだ！やれ！！」

マザーの大声に、ラビットは即座に身体を起こし、Ｍ４の下部に付いているＭ２０３“グレネードランチャー”を発射した。

拍子抜けするような音をさせて飛んで行ったグレネードは、白く薄

い煙の尾を引いて戦車の足元に着弾。同時に、発射音からは想像できないほどの爆発を起こし、そのキャタピラを引き千切った。

「ナイスだ！ラビット！」

動きを停めた戦車から脱出した兵士を、マザー達は容赦なく撃ち殺していく。

と、不意に後方から駆動音が響き、マザー達は身体を強張らせた。

「後方に駆動音！」

マザーは叫びながら、駆動音の方向に銃口を向けた。

「アリシアー！」

駆動音と共に聞こえた男の声に聞き覚えがあったのか、アリシアは頭を上げ声の方を向く。

先ほど撃破したそれとは違うシルエットの戦車が、ゆっくりと近づいてくるのが見えた。

「ウェルキン！それって戦車！」

アリシアは戦車に驚きながらも喜びの声を挙げたが、戦車の上に乗っていたパンサーが、目の前にいた帝国兵を撃ち殺し、

「感動の再会は後にしてくれ」

言いながら飛び降りた。デルタ全員もそれに続き、戦車から飛び降

りて走る。
≪こちらトマホーク０１、町に到着。指示を待つ≫
無線から声が響く。友軍の戦車が到着したようだ。
パンサーがすかさず命令する。
「トマホーク、敵戦車だ！レーザー照射する、やってくれ！」
≪了解≫
無線から返答の声が響くのを聞くが早いか、パンサーが命令する。
「デュース！これで戦車をマーキングしろ！」
デュースはパンサーから手渡されたレーザー照準器を手に、大通りに出て戦車にレーザーを照射した。
≪目標確認、攻撃する≫
守っていた正門を壊しながら現れたのはＭ１Ａ１エイブラムス、米軍の主力を担う、世界最強の戦車である。
突然現れた巨大な戦車に、帝国戦車は急いで照準を合わせるが既に遅く、
「照準よし！」
「撃て！！」

先にエイブラムスの１２０ｍｍ滑空砲が火を噴き、砲弾が正面装甲で炸裂した。

帝国戦車は大爆発を起こして四散、その破片は周囲の兵士を見舞い、二次被害を生みだした。

随伴していたパターソン軍曹率いる第７５レンジャー連隊１個小隊が即座に周囲に展開し、ＬＺ（ランディングゾーン）を確保、スモークを焚くが早いか、すぐに『ブラックホーク』が現れて着陸した。

『ブラックホーク』見たウェルキン達は、まるで宇宙人でも見たように呆気に取られていた。

3話　義勇軍

「よし、撤収するぞ！」

戦闘を終え、民間人の救出作業を開始したアメリカ軍面々。突如現れた空飛ぶ箱舟こと、『ブラックホーク』輸送ヘリの姿に皆が目を奪われ、

「空を・・・・飛んでいます！！」

と空を見上げたまま動かなかったイサラに、口をあけて唖然とするアリシア。

米軍の救出した人数は結構なもので、『ブラックホーク』１機では足りず、無線で『チヌーク』を呼び出した。

『ブラックホーク』では妊婦と数人の民間人を野営地まで運び、次に飛んできた『チヌーク』にラビット達が迎えに行った母親達とアリシア達の自警団、ＳＥＡＬｓ達が乗った（その時ヘリに乗るのが初めてなアリシア他数名は、まるで子供のように興奮していた）。

そして残されたエーデルワイス号を、Ｍ１と随伴歩兵、ＡＴＶが先導した。

≪こちらトマホーク１、聞こえるか？≫

ウェルキンはいきなりの無線に驚きながらも、張りのある元気な声で返答する。

無線機から聞こえる声は、これまで彼が聞いたどのような無線音声よりも、遥かにクリアな音質だった。

≪は、はい。聞こえます≫

≪そちらのコールサイン、、、、、では分からんかな、、、、、そうだ、君の戦車の名前は？≫

≪名前ですか？この戦車はエーデルワイス、エーデルワイス号です≫

≪エーデルワイス、、、、、いい名前だ。これから君をエスコートする、離れずついて来てくれよ≫

Ｍ１を先頭に、エーデルワイス、ＡＴＶの順番に並んだ車列は、ひとまず安全と思われる野営地点に向かった。

野営地に着くと、工兵が戦車やヘリなどの簡易点検を、衛生兵がナイチンゲール宜しく負傷者の手当てを、ラビットが先程助けた少女をあやしたりなどせわしなく動き回る中、帝国軍に占拠された町を、アリシアとウェルキンは悲しげに見つめていた。

「よう、こんな所でなにしてんだ？」

２人が振り向くと、そこにはデュースがいた。ふと見ると、その両手には数本のドリンクが握られている。

「ほらよ」

デュースは2人に飲み物を投げ渡し、彼らと同じく町の方を眺めはじめた。
町はそこらかしこから黒煙が上がり、所々に翻る帝国の国旗と共に風に揺られていた。

「、、、、これからどうするんだ？」

野営地の方に戻りながらデュースが聞くと、ウェルキンが答えた。

「ランドグリーズに向かおうと思う、いまの状況なら、召集令が出ているはずだから」

「召集？」

デュースは思わず首を傾げた。
ウェルキンが言うに、ここはガリアという中立国で、小学校から大学までの教育機関では、軍事教練が必修科目になっているらしい。
そして国民民兵制度なるものも存在し、有事の際には一般市民男女問わず、すべてが義勇軍として召集されるのだという。

「永久中立国か・・・・スイスみたいもんか」

デュースはウェルキンの話を聞いて、同じ中立国であるスイスを思い浮かべ言葉を漏らした。
それが聞こえたのか、ウェルキンが首を傾げる。

「スイスって？」

「俺達の知っている国に、ガリアと同じような国があってな。そこ

がスイスって名前なのさ」

「へぇ～」

アリシアが思うところがあったのか、目を丸くして頷いた。

そうしながら歩いていると、野営地に到着した。

「ウェルキン」

思い出したように、デュースがウェルキンの方を向きながら声をかける。

「君の事を隊長達が呼んでいてな。俺が向かえに行ったのもそのためなんだ。ついて来てもらえるか？」

ウェルキンは頷いてデュースについて行くと、一機の『チヌーク』の前に着いた。

そこには武装したレンジャーが銃を手に警備しており、彼らはデュースの姿を認めると敬礼した。

デュースもそれに返すと、レンジャーの一人が、肩越しに親指で後ろを指さした。

「中でパンサー達が待っている」

ウェルキンは導かれるまま『チヌーク』の中に入ると、各部隊の隊長が集まっていた。その中にいたパンサーが立ち上がる。

「自己紹介がまだだったな。アメリカ陸軍第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊「ＡＦＯウルフパック」隊長、パンサーだ。階級は大尉」

彼が自己紹介すると、ウェルキンは慌ててガリア式の敬礼を返した。

まさか将校だとは思いもよらなかったのだろう。

「じ、自分は、ウェルキン・ギュンターであります！」

ウェルキンはガチガチに体を固まらせており、緊張のせいか、声も絞り出したようなものになっていた。

「楽にしてくれていい。我々は違う国の人間だからな」

「は、はぁ・・・」

楽にしろと言われても緊張が抜けないウェルキンは、畏まりながら指定された席についた。

「さっそくで悪いが、まず我々の質問に答えてほしい」

パンサー達の質問は、基本的にはデュースが聞いたのと変わらなかったが、

彼らの質問は、この国の現状や外交、そして内政などにも及んだ。

「なるほど・・・・・ガリアは現在、帝国と呼ばれる連合と戦争中で、国境に近かった君達の町、ブルールに攻め込んできた帝国軍と君らの自警団が交戦していたところに、我々が現れた、と」

フォスナー中尉が、ウェルキンの回答を簡略化して述べると、

「はい・・・・・ところで、僕からも質問があるんですがよろしいですか？」

大学で幹部候補教練過程を履修していたウェルキンは、その場の空

気に慣れたのか質問を返す。

「・・・・なんだ？」

「あなた達は、アメリカという国の軍人だというのは分かりました。ですが僕は、アメリカという国を見たことも、また聞いたこともありません」

ウェルキンはパンサー達を真剣な表情で見つめながら続けた。

「あなた達は・・・・・・何者ですか？」

その場に不気味な沈黙が流れた。ウェルキンの額から頬へ、一滴の汗が流れ落ちる。

沈黙を破ったのはマザーだった。

「・・・・・このことは他言無用でお願いする」

「マザー！」

咄嗟にパンサーが咎めるが、マザーは続ける。

「今の状況ではしかたない。ウェルキン君は質問に答えたんだ、こちらも答えなければフェアじゃない」

マザーはパンサーを諭しながら皆を見回すと、ウェルキンに向き直って続けた。

「我々は別の世界・・・・異世界とでも言えばいいのか？そこから

きた」

「・・・・・・」

どんな内容だろうかと覚悟していたウェルキンだが、遥か斜め上を行く内容の回答に、思考が停止した。

「まぁ、いきなりこんなこと言われれば、俺達でも迷わず精神病棟をオススメするさ」

マザーが言いながら嘆息すると、周囲の人間も同じ考えだったらしく、同じように溜息が漏れた。

「だが話に聞くところこの世界、最低でもこの国や帝国、連邦などには、ヘリコプターなんていう航空機は無いんだな？」

「・・・・・・飛行船などはありますが、こんなものは見たことがありません」

記憶から探し出すかのように考えながらウェルキンが言うと

「更に言えばこの世界の主な燃料はラグナイト鉱石だそうだが、俺達の戦車やヘリ、車は、ガソリンという液体燃料で動いている」

マザーが言うように、未知の燃料にオーバーテクノロジーと呼んでも過言ではない技術、正規軍顔負けの洗練された行動、極めつけは国の情勢や、主な国家の場所を知らないことである。この事から導き出された答えは、、、、、。

「本当にこの世界の人では無い・・・・と？」

「信じてくれ、としか言えないな」

ウェルキンは少し考えた後、

「分りました。信じます」

マザーの目を見ながらはっきりと頷いた。

「そうしてくれると助かる。だが最初に言った通り、この事は他言無用にお願いする。もし外部に漏れるようなことがあれば・・・・」

マザーはウェルキンを睨む。眼光だけで撃ち抜きそうなぐらい鋭い視線を浴びせながら、彼はさらに続けた。

「我々は、君を殺さなくてはならなくなる」

発せられる気迫にウェルキンは冷や汗を流し、唾を飲み込む。口の中が渇くのを感じながらも、

「はい」

マザーから目を逸らさずに頷いた。

「・・・・・いい目をしてるな」

マザーから先程の気迫が消え、その顔に笑みを浮かべた。

「あんだけ脅してやっても目を逸らさないとは、いい根性してるぜ。どうだ、俺の部隊にこないか？」

笑いながらウェルキンの背中をバンバン叩くと

「待ってくださいよ大尉、彼は戦車兵みたいんで自分の部隊が適任でしょ」

戦車小隊のマクレイン曹長が会話に参加する。突然の談話に混乱するウェルキンの肩に、手を置いたのはパンサーだった。

「みな君を信用したのさ」

パンサーが顔に笑みを浮かべながら言うと、ウェルキンはホッとした表情になった。

「だが、信頼はしていない」

ウェルキンは不思議そうな顔をしてパンサーを見る

「信用と信頼は違う。俺達は兵士だ、仲間を信用しないと戦争などできん。同じ部隊に来ると信用から信頼に変わる」

パンサーは談話するマザー達や、外にいる民間人達と会話するデュースやラビットを見回し、ウェルキンの方を向いた。

「何故なら皆、仲間の背中を守ると言う行動で示しているからだ。信頼を勝ち取りたければ行動で示してくれ、俺は期待してるぞ」

パンサーはそう言いながら、デュースの方に向け歩いてゆく。

「はい！頑張ります！」

パンサーの背中にウェルキンが元気に答えると、パンサーは片腕を上げてそれに応えた。

簡易会議の結果、米軍の目的地はランドグリーズへと決まり、ひとまずは腹ごしらえとなった。
そうして皆で晩飯を食べだしたのは良いが・・・・・・あまりに酷いレーションの味に、ウェルキン達の顔はみるみる青ざめた。
中にはその場で悶絶する者すらいる。何人かが「何故これを食べられるのか」と聞くと、

「もう・・・・なれたよ」

問いかけられた兵士達は遠い目をしていた。

そして早朝、一行は帝国軍に発見される前に移動を開始した。『アパッチ』の各種センサーや目視で周囲を警戒しながら進んだのも幸いして、一行はこれといった障害もなくランドグリーズに到着した。
しかし・・・・・

「止まれ！」

一行は到着するが早いか、警護する衛兵に銃口を向けられた。

ウェルキンが説明すると、衛兵は民間人とウェルキン達の身柄は保障すると約束したが

「貴様らは何者か！？」

米軍へ対する対応は変わらなかった。

「待ってくれ、俺達は流れの傭兵だ。ブルール近郊に野営してるところ、戦闘に巻き込まれてな。民間人を攻撃していた帝国軍と交戦、ここに義勇軍があると聞いて雇われにきた」

と、マザーが苦し紛れに説明するも、

「黙れ！戦車を多数所持し、飛行船をもつ傭兵がどこにいるか！！」

と、空から降りてきたヘリに唖然としていた衛兵は、やがて向き直って怒鳴り散らした。

周囲には野次馬が人だかりを作ったが、銃を持った衛兵に接近を阻まれていた。

「だが、それらが味方になると言っているんだ」

「黙れと言っとるんだ！！」

衛兵の反応に、米兵達は諦めに近い感情を抱いた。自分達は正規軍だが、命令ではなく自己判断で民間人を救助し、ここまで護衛してきた。もう少し優遇されても良いではないか。

だがもし自分たちが衛兵の立場なら、所属もはっきりしない正体不明の連中を、あっさりと味方に引き入れる事は考えられない。なにより彼ら自身、このような待遇を受けたのは始めてではなかった。

「貴様らか、流れの傭兵というのは」

数十名の兵士を連れて現れたのは、鼻の下にプロペラ髭を蓄えた中年太りの男だった。

「わしはガリア中部方面軍総司令官のダモン将軍だ」

マザーはダモンの身体から漂う雰囲気で、この男は無能だと感じた。

「ハッ！そうであります、閣下！」

だが彼が軍人である以上、相手がいかなる人物であれ、将官には敬意を払った態度を取らねばならない。

彼はそう考える前に、気をつけの姿勢をとって大声で答えた。

「貴様らが流れ者で、我々の側につきたいという事はよく分かった。ここで立ち話もなんだ、君らをわが兵舎に招待しよう」

手のひらを返したような対応の切り替えに、マザーを含め、米兵達は何が起こったか理解できなかった。

そして同時に、彼らはダモンの無能さに感謝し、温かい食事と寝床にありつけるかもしれない期待に心を躍らせた。

「うむ、あの空飛ぶ乗り物だが・・・・」

ダモンは駐機された『チヌーク』や『アパッチ』、『ブラックホーク』を眺めると神妙な眼差しで答えた。

「あれは戦力としては如何ほどになるのか？」

マザーは即座に答える。

「あの機体は、自分の考えるところでは、一機で精鋭戦車一個連隊程度かと」

マザーの言葉にダモンは胡散臭そうな表情をした

「あれ1機で一個連隊と同等など・・・・信じられんな」

「お言葉ですが閣下、これらは空を自由に飛べる他、対戦車用兵器を装備しております。空に向けて砲弾を撃てない戦車はいい的です」

「ふむ・・・」

ダモンは顎に手を当て考えていると

「貴様らがわしの私兵になるのであれば、雇ってやらんでもないが？」

ダモンの提案は魅力的だったが、マザーの心は既に決まっていた。

「お断りします」

自分の提案を断られ、元々沸点の低いダモンの怒りは、即座に頂点に達した。

「き、貴様等！だれにそんなこっと言ってるのか分っているのか！・・・・フン、まぁ良い」

しかし彼は急に怒りを窄めると、下品な笑みを浮かべながら更に提案した。

「わしの下に入れば有効に使ってやれるし、給金や勲章もタンマリ出してやるぞ？」

ダモンはマザー達はあからさまに買収しようとしたが、マザーも負けずに

「お言葉ですが閣下、我々一同は義勇軍に志願すべくこちらに参りました。義勇軍に志願する以上、この地を我が祖国としてガリアを守る所存です。しかしながらそれは、決して貴方だけを守るためではありません」

とダモンの眼を睨みながら真剣な表情で答え、更に続けた。

「、、、、、交渉が決裂したの場合、我々は帝国の軍門へ下る覚悟もできております」

マザーの言葉に、兵士、そしてウェルキン達は言葉を失った。

空を自由に移動できる乗り物に、恐らくガリアや帝国のそれをも凌駕するであろう性能を持つ９両の戦闘車両、そしてそれらを操る完全武装の兵士２４０名が、ただでさえ劣勢のガリアに牙を向けるというのだから。

ダモンは顔を真っ赤にしてマザー達を睨み、マザー達も怖気づくことも無く睨み返している。

何か物音がすれば、それをきっかけにして銃撃戦でも始まりそうな、まさに一触即発の状態だ。

「ダモン将軍」

ダモンの後ろに立っていたメガネの女性士官が、長く不気味な沈黙を破った。

「彼らは義勇軍に志願すると言っておりましたが、ここは小官にお任せ頂けませんか？」

しかし脳天に血が昇りきっているダモンは、まったく聞く耳など持たずに怒鳴り散らした。

「やかましい！こいつらは帝国のスパイだ！衛兵を呼べ！！」

マザー率いる米軍将校達は、ダモンの言葉に内心呆れ果ててしまった。やはり交渉には無理があったのだ。これではアフガンとまったく同じだ、と。

しかし女性士官は、顔色一つ変えずに淡々と続けた。

「しかし閣下、彼らは傭兵と聞き及びました。傭兵にならず者が多いのは事実ですが、この現状で帝国に雇われていないのは不自然です。先ほどの発言は、傭兵らしい彼らなりの交渉術では？」

女性士官はメガネをクイッと上げ

「それにもし、彼らが義勇軍に編入されたならば、兵力不足の我が軍としては好都合と考えます」

ダモンは苦虫を噛み潰したような顔をして、ドカドカと足音を立てて帰っていった。

彼が部屋のドアを叩きつけるように閉めて出ていくのを見届けると、マザーはわざとらしく大きな溜息をついた。

将校達も緊張が解けたのか、溜息をついたり顔を見合わせていた。

「私はエレノア・バーロット。義勇軍第3中隊長、階級は大尉だ」

「やっとまともに話せる相手がきたか」

マザーは更に大きく溜息をついた。しかし今度のそれは、周囲に安堵を与える為のものだ。

「部屋を待たせてある、付いて来てもらえるか？」

バーロットがマザーに促し、彼はそれについて行こうとしたが、ふと思い至って立ち止まった。

「待ってくれ。その前に確認したい」
バーロットが立ち止まり、こちらを振り向くのを確認したマザーは、周囲を一瞥してから尋ねた。
「俺達を雇ってくれるのか？」
バーロットは口元に笑みを浮かべながら
「そのために部屋を用意したのだ。詳細な確認が必要だろう？」
「言葉の通じる相手で助かった。俺はマザーだ。ところで、あいつらは何処に向かわせればいい？」
マザーは白い歯を見せて笑うと、窓の外を指さした。そこには２５０あまりの米兵が、兵器の周りで思い思いの仕草に耽っていた。
「彼らは兵に案内させる」

「詳細な設定はこれでいいか？」
ダモンとの交渉決裂から数時間後、マザーとバーロットは、用意さ

れた部屋で給金や配属諸々の確認、部隊構成などを話していた。

「あぁ、それと無理な相談だが、良いかな？」

「俺達に独立して動ける権限をくれないか？」

「・・・・・・理由を聞こう」

バーロットがマザーに問うと

「俺達は傭兵だ、義勇軍の中にも俺達を快く思わない連中がいるかもしれない。突然背中を刺されるのだけは避けたい。それに俺達を監視するなら、団体ごと監視したほうが好都合じゃないのか？」

バーロットはマザーの言葉に耳を傾けながら

「もちろん其方の指示に従う。だが此方も、貴方がたを制限する権限が欲しい」

「正直なのは良い事だ。まったくその通りだな」

「そうだな・・・・・独立遊撃部隊にでもできないか？」

考え込み・・・・数分たつと、バーロットがソファーから立ち上がり窓の外をみると

「ダモン将軍対策か？」

マザーは頷き

「この国にきてブルールでは世話になった。彼らやそんな人達のためならいいが・・・・正直、ヤツの指示には従いたくない。俺達も、ダテに長く生き延びてないからな」

肩を竦めながら言うと

「基本的には、義勇軍の一員として命令に従ってもらうが構わないか？」

「あぁ、構わない」

バーロットはソファーに戻ると

「次の問題は、弾薬か・・・」

ガリアで使用されている小銃弾は７．５ｍｍだが、米軍の使用するそれは５．５６ｍｍと７．６２ｍｍ弾で、戦車のエンジンやヘリのエンジンをラグナイト仕様に変え、戦車砲もガリアで一般に使用されている重戦車ですら７５ｍｍなのが、Ｍ１エイブラムスは１２０ｍｍと、それこそ規格外のものであり、帝国軍の誇る世界最強の重戦車ですら、その口径は８８ｍｍなのである。

「小銃の弾を今すぐ造っても、前線に届くのに３週間、、、、、。それも工場が動いてくれれば、の話だ」

マザーが溜息つきながら言い

「それに戦車砲も付け加えるとなると、、、、、もはや絶望的だな」

バーロットも溜息をついた

「・・・・だが方法が無いわけではない」

マザーはバーロットの方を向くと

「あなた達が戦果を挙げれば、上が動いてくれるかもしれない」

マザーはしばらく考えていたが、数秒も経たずに立ちあがって、

「了解しました、義勇軍第3中隊独立遊撃隊、マザー中尉お受けいたします」

バーロットにアメリカ式の敬礼を披露して見せた。

3話　義勇軍（後書き）

交渉シーンはかなり難しく難産でした

あの無能将軍を撃ち殺すか流血沙汰にするか迷うほどでしたから

戦場のヴァルキュリアの何か重要な公式設定を知っている人は感想で教えてもらいたいのですが。

うp主はそうゆう詳しいのは知らないのでお願いします

4話　春の嵐

マザーが作戦室にいるのは異世界にきて2回目の戦闘のブリーフィングにためである

ウェルキンは少尉となり第7小隊を率いて、重要拠点であるヴァーゼル橋奪還の足掛かりの為に西岸河川敷の敵拠点制圧を終え3日後のことである

元々ヴァーゼル橋は首都ランドグリーズの街道が通る道で正規軍が防衛していたのだが帝国軍にあっさり敗北、そのまま尻尾を巻いて逃げたのである

「中尉、もういたのですか」

作戦室の椅子に座って考えていると、ウェルキンが入ってきた

「あぁ、今回が義勇軍に入って初めての戦闘だからな。遅れる訳にはいかん」

マザーが肩を竦めながら言い、ウェルキンはマザーの目の前に座った。その後も各小隊長が集まり

「よぉ、ウェルキン」

ウェルキンの友人で義勇軍第1小隊隊長であるファルディオ・ランツァート少尉である

「お疲れ様です、中尉」

フォルディオはマザーに敬礼しながら挨拶をした。彼は傭兵扱いである米軍を嫌っていなかった。王手1歩手前のガリアに参戦し、友人であるウェルキンと町の人々を無償で助けてくれたのを聞いて会ってみたいと思っていた

実際に会ってみても話しやすくフレンドリーでダルクス人だからと差別しない広い心にファルディオは好印象を抱いていた

「お疲れさん、今回はでかい任務になりそうだ」

マザーもファルディオに敬礼した

「でしょうね、今回は重要拠点であるヴァーゼル橋の奪還。第3中隊の作戦目標であり、敵も首都攻略の重要拠点でしょうし」

そんな会話をしているとドアが開き

「全員そろっているか？」

と、言いながらバーロット大尉が入ってきた。小隊長全員とマザーは椅子から立ち上がり敬礼をした、バーロットも敬礼をし中央の椅子に座ると立っていた全員が着席した

「第7小隊の働きにより西岸部敵拠点を占拠。陣地を構え、攻勢の足掛かり得ることができた。これより正規軍ヴァーゼル防衛大隊と共同で［春の嵐］作戦を開始する。我が義勇軍は本作戦の先陣を切る形でヴァーゼル橋を渡り、東岸敵本陣制圧にかかる」

するとファルディオが手を上げ質問する

「大尉、ヴァーゼル橋を渡るには敵橋頭保を突破しなかればなりません。正規軍からの援軍や物資供給などの支援はあるのでしょうか？」

バーロットの顔が若干渋り

「・・・・・正規軍は我らが橋頭保を攻略した段階で攻勢を開始するとのことだ」

その答えにファルディオは驚いた表情になり

「そんな・・・・俺達を捨て駒みたいに扱いやがって・・・・・・」

苦虫を噛み潰したような表情をするファルディオに

「気持はわかる。私も兵士時代には同じことを感じていたわ」

昔を思い出すみたいにバーロットが言うと

「だけど、時に無茶や無理を承知で作戦に臨むのが軍隊というものなのよ」

マザーはそれに同意した。特殊部隊Ｎｅｖａｙ ＳＥＡＬｓとしてＴｉｅｒ １ Ｏｐｅｒａｔｏｒとして上から何回も無茶な任務を言われたが、それを成功させ、仲間に為にヘリから飛び降りるなどもやったことがあるのだから

自分達の境遇はバーレットを信用できると信じ、話した。最初はもちろん奇異の目で見られたが、説明するとちゃんと筋が通っており、

思いのほか頭が固くなかったのかすんなり信じてくれた

「しかしファルディオの意見も一理ある。我々だけで、あの橋頭保を突破するにはどうしたものか・・・・」

皆が頭を捻るなか

「バーレット大尉」

マザーが手を上げた

「自分に案があるのですが・・・・橋付近の偵察に行ってもよろしいでしょうか？」

「自分もよろしいですか？」

マザーに続きウェルキンも言うと

「橋の偵察・・・・？あぁ、構わないが」

ウェルキンとマザーは席を立ち、バーロットに敬礼すると部屋をでた

「お前も何か案があるのか？」

マザーが歩きながらウェルキンに聞くと

「うん、まさか中尉にもあるなんて」

すると前から一人の女性が現れ

「ウェルキン！」

その女性はアリシアだった

「どうしたんだい？そんな慌てて？」

ウェルキンが不思議そうな顔をすると

「ウェル・・・ギュンター隊長！隊員同士が口論を起こしているんです」

アリシアはマザーがいるのを見てウェルキンの呼び方を改めた

「ほっておけ、新人同士じゃよくあることだ」

新人同士が口論しあう場面はＳＥＡＬｓでもよくある光景であり、そこから喧嘩がおき殴りあい、独房で入るというサイクルで結束を固めるのだ

「そんな無責任じゃ！？」

アリシアがマザーに反論しようとするが

「でも、お互いの意見をぶつけ合うことで結束力が強まることもあるし大丈夫じゃない？」

ウェルキンもマザーと同じ考えでアリシアが唸っていると

「と、とにかく！同じ隊員どうし衝突しているのを見過ごす訳にはいきません！ご同行おねがいします」

アリシアがウェルキンの腕を掴み引きずっていく。その姿にマザーは苦笑いしながらついていくと

「どかしたんですかあれ？」

ラビット達ＳＥＡＬｓが引きずられるウェルキンを見てマザーの聞くと、ついてくるように言い、ＳＥＡＬｓ全員がついて行った

現場に到着すると赤みがかった茶髪の女性がイサラの胸倉を掴んでいた

「やめないか！」

その状況を見たウェルキンが走ってむかうと、女性は鼻を鳴らしイサラの胸倉をはなした

「何をしてるんだ」

「見てわからないのかい？このガキだよ。なんでこの部隊にダルクス人が紛れ込んでいるんだ」

その言葉にマザー達が眉を顰める

「こんな不吉で油臭せぇ奴と戦えるか！こいつらは何もしない疫病神なんだよ！」

流石にその言葉にラビットが介入しようとしたがマザーに止められる。近くにいたデュースとダスティーがその場を見て近づくと

「隊長さんよぉ、俺達はダルクス人と一緒じゃ戦えねぇんだよ。それになぁ実践経験のないボウズの言葉になんか誰も聞きやしねぇよ」

古参兵らしいガタイのいいオッサンが言うとデュース達も眉を顰める

「おい、何があったんだ」

デュースがラビットに尋ねると

「人種差別だよ、ただの風説でしかないものなのに・・・・」

ラビットは拳を握りしめる。あの時、保護した母親から聞いたダルクス人の迫害。ダルクス人の災厄なんて誰も見たこともない風説に皆がよってたかって迫害をしていると聞いた時は耳を疑った

アメリカでも黒人を差別していたが、軍ではそんなことをしなかった。もし、していたら上官に殴られ独房行きだ

さらに新人の隊長だからと指示に従わないと古参兵の態度に

「アホか、お前らは」

マザーが介入した。ＳＥＡＬｓとデュース達も今のやりとりに怒気

を浮かべていた

「あぁ、誰だてめぇ」

おっさんがしかめっ面でマザーの方を向いた

「ダルクス人がいるから戦えない、新人だから指示に従えない・・・・軍隊なめてんのかお前等、まだ訓練中の訓練生のほうがよっぽど有能だ」

「なにっ！」

女性のほうが突っかかると

「命令違反に上官侮辱罪、立派な軍法会議ものだ。俺が上官なら今すぐにでも殴り倒して独房行きだ」

マザーが睨みながら言うと女性の方は言葉をつまらせた

「誰だかしらねぇが、使えない隊長じゃこっちが困るんだよ。それに知らないのかダルクス人の話を？」

「しらんな、そんなガキのような話。風説でしかない馬鹿げた話を信じ込みダルクス人だからと迫害し見下す・・・・実にくだらない」

マザーはイサラの方をみると

「彼女はこんな小さい身でありながら、あんなデカイ戦車を1人で整備していた。普通ならもっと人数が必要だろうに・・・・」

すると女性が

「ふんっ！ダルクス人の油臭さお家芸じゃないか」

と鼻で笑いながら言うと

「それが有能な証拠だ」

マザーは女性の方を睨みながら見ると、女性は背中に冷や汗が流れた

「油臭いと言うことは、それだけ真剣に作業に取り組んでいると言うことだ。整備兵が油臭くなかったらサボっているのと同意義だ」

正論を言われ黙ってしまう女性

「さらには戦車の操縦まで出来るときた。1人で整備し即その場で戦闘に参加できる。これが有能じゃなく何になる」

女性からオッサンの方を向くと

「あんたは古参兵なんだろ、なら軍隊がどんなものか知っているはずだ。どんな理不尽な命令でも実行しなければならない。それこそ、その場で糞を出して食えと言われてもだ」

あまりにも極端の例に米兵達をのぞく全員の顔が青ざめた。そしてマザーはオッサンを睨みながら

「なぜ助け合わない、なぜ話し合わない、同じ部隊なのだろ、信頼する仲間・・・いや家族のはずだ。それをガキのような言い訳で何

もしないのは訓練生以下の無能だ」

その言葉にムカついたのか、オッサンはマザーをにらみ

「知ってるようなことを言うな、戦場にでたことがない新人が。いいか、戦場ではな経験がものを言うんだ」

オッサンの言葉にマザー達は吹き出し、大声をだして笑った。その態度に当然怒り出すオッサン

「何がおかしい！」

「いやなに、まさか俺達を新人扱いするとはな・・・・・思わず笑っちまった」

マザー達の笑いがおさまると

「特殊作戦部隊でありＴｉｅｒ　１　Ｏｐｅｒａｔｏｒである俺達から見ればお前等は新人以下だ」

オッサンは眉を顰める

「アフガンで山岳地帯での攻防、僅か４人で敵拠点での救出に敵航空基地の占拠・・・・・数え切れないほどの無茶な任務をしたな」

マザーの後ろからデュースが１歩前に出て

「敵拠点に侵入しトラックをマーキング、敵のど真ん中で狙撃し味方の援護、そこからの脱出・・・・・その他いろいろしたな。それでもまだ新人あつかいするか？」

オッサンと女性が疑わしい目でマザー達をみてくる。だが、これらは全て事実だ。上からの無茶な作戦を成功させる彼らは特殊部隊でも選び抜かれたＴｉｅｒ　１　Ｏｐｅｒａｔｏｒなのだ

「俺にこんな可愛い子が疫病神なんかに見えない。どちらかと言うと勝利の女神じゃねぇか？」

デュースがイサラの頭を撫でると、イサラは若干頬を赤らめた

「それにまだ文句があるなら・・・・」

拳を鳴らしデュースはオッサンを睨む

「俺が相手してやるよ」

すると後ろからダスティーにラビット、ブリーチャーやブードゥーもデュースの横に並ぶ

「待ってくれみんな！」

するとウェルキンが間に入り込み、オッサンの方を向いた

「僕の指揮がそんなに信用できないのなら賭けをしよう」

ウェルキンは笑いながら

「４８時間以内に橋を奪還する。それが出来なければ隊長を辞退する」

それにマザー達は関心し、アリシアとイサラは驚いた表情をし、オッサン達も驚いた表情をした

「そのかわり作戦が成功したら僕の指示にしたがってくれるかな？」

ウェルキンはいかにも普通に言うと

「がっはっはっは！」

オッサンは笑いだし

「おい、今の言葉・・・・2言はねぇな？」

「もちろん」

オッサンの問いに即答するウェルキン、マザー達は今回の作戦は楽しくなりそうだと笑っていた

「よく考えたな、こんな無茶なことを」

流石のパンサーもこの作戦には苦笑いだった

その作戦とは川を戦車で潜り渡り切ると言うのだ。イサラがエーデルワイス号に耐水処置を施し、数分間だけ潜れるようにしたのだ

その作戦にくわえ独立遊撃隊こと米軍は第７小隊と共にデルタと第７５レンジャー連隊２個小隊に加え橋の正面にＭ１エイブラムス１両にＭ２ブラッドレイ１両、４０ｍｍグレネードに１２．７ｍｍのチェーンガンを積んだストライカー１両にＮｅｖａｙ　ＳＥＡＬｓとレンジャー３個小隊を投入している（１個小隊１５人）

そして対岸にいる帝国兵を轢き殺しながら見事上陸に成功した。ハッチからウェルキンが上体だけ外にでると

「渡河成功、作戦開始！」

信号弾を空に向け発砲、そして空中で光った

「合図よ！皆！」

アリシアがそう叫ぶと

皆がボートに乗り込む・・・・・木で出来たボートに、さらに手漕ぎだ

「・・・・なぜ軍なのにゴムのボートが無いんだ？せめてエンジンはあってもいいだろ」

ベガスが愚痴を零しながら漕ぐと

「文句を言うな、俺も十分驚いてる」

ダスティーも必死に漕いでいた。そして対岸にボートが着いき、皆が坂へ走りだそうとしたその時

「ＧＯ！ＧＯ！ＧＯ！」

既にデルタもレンジャーも既に走りだしており、軽々と坂を上り

「コンタクト！」

パターソン軍曹の部隊であるアダムスがそう大声でいい、１人を撃ち殺し、パターソンも１人撃ち殺していた

「クリア！」

アダムスが言い、近くの家の壁に張り付きながら進んで行く。その時にやっと第７小隊の面々が坂を登り切っていた、アリシア他隊員はレンジャーとデルタの動きに脱帽し、オッサン・・・ことラルゴもその動きに驚きを隠せなかった

アメリカ軍特殊作戦部隊「ＡＦＯ　ウルフパック」

土嚢で出来た簡易陣地に隠れている帝国兵の１人の頭が撃ち抜かれた。それに驚いていた帝国兵だが、そう思考しているうちに５人とも撃ち抜かれた

梯子を使い家の屋上でＳＲ２５を構えたデュースとその護衛であるダスティーが狙撃したのだ

≪エネミークールダウン、クリア≫

≪支援感謝する、進むぞ≫

パターソン軍曹の分隊がその簡易陣地の中に隠れる、すると梯子を誰かが上る音がし2人が構えると

「あら、先客がいましたか」

第7小隊狙撃兵のキャスリンである

「いや、丁度いい、俺はパンサーの援護をする。ダスティー、彼女の観測主を頼む」

「了解」

ダスティーが頷くとキャスリンが狙撃位置についた

≪デュース≫

無線からパンサーの声が聞こえた

≪目の前の2人を片づけろ≫

パンサー達の目の前に2人の突撃兵がいた。デュースが1人の頭に照準を合わせ、引き金を引く。マズルフラッシュを起こし、回転しながら弾は目標めがけて飛翔し、ヘルメットの鉄板を用意に撃ち抜き、頭蓋骨に穴をあけ、脳を抉りながら貫通すると突撃兵は琴切れたように膝を付き倒れた

もう一人に照準を合わせ、スコープを覗くと綺麗にHS（ヘッドショット）を決められらていた。撃たれた方向からして隣のキャサリンじゃない、それを

一瞬で思考し飛んできた方向を見ると・・・・・ガリアの狙撃兵がいた

≪よし、進むぞ≫

パンサーの声が無線から聞こえ、デュースは意識を集中させた

「よし、移動するぞ」

ダスティーはがそう言うと、デュースはすぐさまＳＲ２５を背中のマウントに掛け、ＨＫ４１６を構え梯子の下と周り警戒した

「クリア」

デュースが先に降り銃を構え警戒し、次にキャスリン、ダスティーと降り移動を開始した。途中キャスリンと別れ狙撃ポイントに到着、デュースがＭｋ．２３に持ち替え音を立てずに梯子を登っていく

登り切る手前で屋上を確認、敵狙撃兵が１人いた。デュースはゆっくりと屋上に登り切り、Ｍｋ．２３　をホルダーに戻すとナイフを取り出した

相手は気付いて無いみたいでスコープを覗いており、デュース足音を注意し近づき・・・・口を塞ぎ喉を掻っ切った

当然の出来ごとに暴れることも足掻くこともできず命を刈り取られた狙撃兵をどかし

≪エネミークールダウン、クリア≫

無線で下にいるダスティーに伝えると、梯子を上ってくると同時に

「キャァァァァッ！」

甲高い悲鳴が聞こえその方向を見ると足を撃ち抜かれたガリア軍兵士が倒れていた。いまこの場にるのは自分たちか第７小隊のどちらかであり、すぐさま第７小隊の隊員であることを理解した

周りにいる帝国兵を片づけ始め、ダスティーが横に来ると

「救助に向かう！援護を頼む！」

「了解」

デュースは急いで梯子を降りるとＨＫ４１６を持ち、彼女の場所まで走りだした。彼女が倒れている場所は激戦区であり、あちらこちらと銃弾が飛び交ってた

それでもデュースは瓦礫に身を隠しながら素早く彼女の元に走り、滑り込むようにスライディングして彼女の元に到着すると襟を掴み味方の方へ引っ張った

「ひっぱらないでくださいまし！」

「そんだけ喋れば十分だ！応戦しろ！」

デュースはＨＫ４１６を数発ずつ撃ち、無駄弾を使わないように慎重かつ迅速に敵兵を葬っていく

「メディック！」

大声をだし叫ぶとレンジャーの分隊が近くの土嚢に滑り込み、ＭＩＮＩＭＩの２脚を立て、土嚢の上に置くと援護射撃を開始する
建物の上からダスティーの援護もあり、弾が切れる前に土嚢の陰に隠れれた

「運ぶならもう少し優しくお願いいたしますわ！」

そんなこと騒いでいたがデュースは無視し、傷の状態を見た。弾は貫通しているが、結構な量の血が出ており、このままでは危険だ状態だった

「メディック！治療を！」

メディックが医療用品の中から止血剤と止血パット、包帯をとりだしたが・・・・・女性はどこからかラグナイトが入った容器を取り出しその光を浴びると、傷口が塞がった

そのぶっ飛んだ光景を目の当たりにしたデュースと衛生兵は言葉すらでないほど驚いていた

「でも、助けてくれたことには感謝しますわ。私はイーディー・ネルソンですわ」

と、言ってまた突撃をかまそうとしてるところを赤みがかった茶髪の女性・・・・ロージーに止められていた

アメリカ陸軍第１大隊第７５レンジャー連隊、パターソン分隊

船で上陸、奇襲をし優勢な状態で始まっていたが、流石に時が経つにつれ持ちなをしていき、今パターソン分隊と第7小隊の面々は機甲部隊と対峙していた

土嚢に隠れた兵士と目の前の中型戦車に顰めた面をしていたラルゴだが

「アダムス！あの戦車をつぶせ！」

「Ｙｅｓ！ｓｅｒ！」

アダムスが背中のマウントにＭＩＮＩＭＩを掛けるとＭ７２ＬＡＷの射撃準備に取り掛かった

「なんだそれ？」

ラルゴはアダムスが準備していたＬＡＷを不思議そうに尋ねると

「本当は対人用だが、この時代の戦車なら対戦車用のロケット砲さ。後ろに立つなよ、火傷じゃ済まないぞ」

ラルゴはこんな細いので戦車を倒せる訳が無いと内心鼻で笑っていた

準備が出来たアダムスは土嚢から僅かに身を上げ、ＬＡＷを構え、発射

ＬＡＷから放たれたロケット弾は秒速１４５Ｍの早さで飛来していき中型戦車の車体に突き刺さった

突き刺さったまま何も起こらなくラルゴは”やっぱりな”と思いながら文句を言おうとしたその瞬間、戦車やが爆発した。砲塔の部分が真上に飛び、火柱が上がり、爆発した戦車の破片で土嚢に隠れていた帝国兵は破片の散弾をモロに食らい絶命した

その威力に唖然としたラルゴに

「ウ～ラッ！命中だ！」

ガッツポーズをし、叫んでいた

「よし拠点確保しにいくぞ！アダムスは援護、ヘルナンデスにイバラは俺に続け！」

アダムスは空になったＬＡＷを捨てＭＩＮＩＭＩを構えた。破片の散弾で大体が死んだが、まだ複数残っていたが、Ｍ１６Ａ４やＭＩＮＩＭＩに蜂の巣にされ

≪こちらパターソン分隊、敵拠点を占拠した！≫

大胆かつ冷静な動きをする米軍にラルゴは自分の言った言葉は間違っていたと渋々認めていた

アメリカ軍特殊作戦部隊「ＡＦＯ　ネプチューン」、Ｎａｖｙ　ＳＥＡＬｓ

作戦開始から15分経過したころから橋の向こう側から帝国兵の悲鳴などが聞こえてきており、無線からも

≪敵戦車撃破！拠点制圧にかかる≫

順調なのか声にストレスを感じていなかった。目の前にいる橋頭保には大多数の戦車が配置されていたが

「座標軸よし！」

「撃てっ！」

120mm滑空砲が敵戦車めがけて飛来し、そのまま敵戦車車体部分に命中、そのまま貫通し後ろにいた兵士に着弾。兵士は跡形もなく爆散し、戦車も爆発、破片が、周りにいた兵士を巻き込み2次被害をくりだした

橋の端から端では帝国戦車の射程外だが、米国が誇る戦車M1A1では近すぎる程の距離であり外すことなどあるはずがない

その様子をみていた第1小隊の隊長であるファルディオに小隊全員が舌を巻く光景だった。自分達が苦戦をしいられてきた帝国戦車に、それも5台もあった戦車を一方的に蹂躙しているのだから

「・・・・・・すごい」

その時のファルディオの表情は・・・・・・笑っていた。その圧倒的な性能、攻撃力、機動性に兵士達の強さに希望を見出していた。敗戦寸前にきた帝国すら手足の出ない傭兵、こんな強ければ名が売

れているはずだが、全くの無名。さらには空を飛ぶことが出来る兵器を所持し怪しさがでかすぎるが、ファルデイオはそれを無視出来る程の高揚感が占めていた

「トマホーク１、前進しろ！」

≪トマホーク１、了解。前進する≫

Ｍ１エイプラムスは前進しながら装填手が弾を込め、砲手が座標を合わせる。敵戦車が撃ってきたがそれを避わし

「撃てっ！」

砲弾が敵戦車に命中、今度は貫通しなかったが、戦車は爆発、破片が帝国兵を襲う。残り１台となった中型戦車は後退を始め、それにＭ２ブラッドレーとストライカーが前進し、随伴歩兵も前進し始める

敵戦車が撃った砲弾はＭ１エイプラムス砲塔正面に命中した。だが、その砲弾は弾かれ川の中に落ちた。その光景は帝国兵には悪夢に見えたのだろう、攻撃をやめ撤退しようとしたが

「逃がさん！座標軸よし！」

「撃てっ！」

Ｍ１エイプラムスの砲弾が敵戦車に命中、そのまま爆散した。周りに帝国兵はいなく、撤退していたが・・・・ストライカーが時速７０ｋｍもの速度で追いかけ、４０ｍｍ擲弾砲を撃ち込み帝国兵の体がバラバラになり、吹き飛ばされただけで逃げようとする帝国兵を１２．７ｍｍのＭ２重機関銃でミンチに変えていった

その後も米軍歩兵が橋頭保を占拠した

そしてウェルキンら第7小隊とデルタが敵本拠点を占拠、［春の嵐］作戦は第7小隊、米軍共に死者を出さず成功に終わった

4話　春の嵐（後書き）

やっと更新できました・・・・・

友人からも小学生の作文の方がましだと言われた時は心が折れ掛けましたが・・・・なんとか書きあげれました（；＾ω＾）

また新しい小説を書こうと思うのですが、今回は学園黙示録Ｈ．Ｏ．Ｔ．Ｄと何かをクロスさせようと考えてますが・・・・今書いてるのをどれか、せめてこれだけでも書きあげないとキツイかも・・・・どうしよう（，・ω・、）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6296v/

Medal of Honor Silver Ster

2011年11月13日18時22分発行